



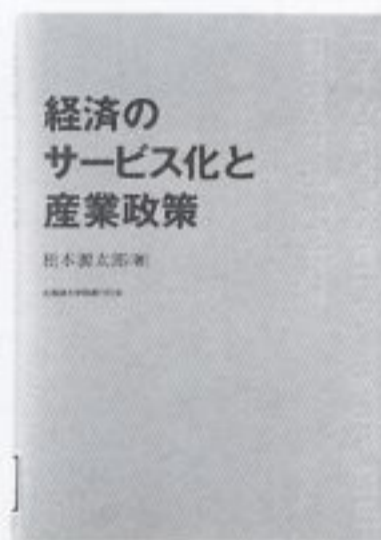
経済分析のための統計学入門 —統計的推測の論理と数理—

原田明信著 (創成社 2001.6.5)

本書は経済分析を目的とした統計学の解説書の形態をとっていますが、通説の単なる羅列ではありません。それは、統計学の本質が著者独自の観点から実在論的に定義され、全体を通じて統計的推測のもつ論理的基礎と数理的基礎と

がバランス良く展開されているという特徴を理解すれば、一目瞭然でしょう。

本書が出版されて軽く1年が経ちますが、その間にも、単純平板、没哲学という旧態以前たる統計学テキストが市場に出回っていることは誠に残念です。統計学に関して実在論的定義に始まり実在に対する帰納的推論の困難さに終わる本書は、本質的には反「教科書」であると言えます。(331.19-H32)

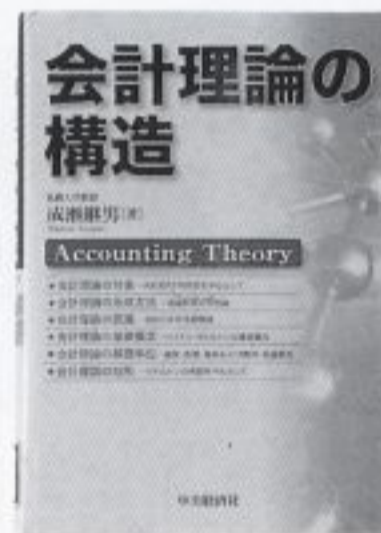


経済のサービス化と産業政策

松本源太郎著 (北海道大学図書刊行会 2001.7)

破壊と創造の世紀、20世紀を終えるにあたり、とくに戦後のわが国産業の大変革と政策対応を総括し、地域が自立し住民の豊かな暮らしを実現するためにはどのような認識に立脚すべきだろうか。本書は、このような問題意識から産業

構造の変化を「サービス化」という視点で分析したものである。経済が成熟化し工業部門の衰退・産業の空洞化が危惧されるわが国経済の再生を考える場合、単なる「もの作り」への回帰ではなくサービス化した経済を基に、いっそうの産業の高度化・就業者の能力向上を考えなければならない、というのが私のメッセージである。(353.9-Ma81)

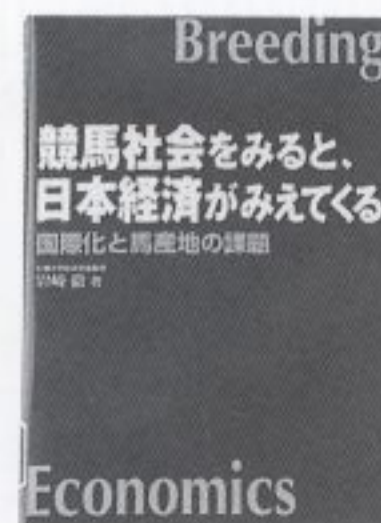


会計理論の構造

成瀬継男著 (株中央経済社 2002.4)

理論とは何でしょうか。これは、おおきなコンセプトに属するものです。種々な考え方が成り立つでしょう。例えば、理論は概念の体系的な増殖装置であるとか、精神活動の論理プロセスであるとか、さらに仮説概念の当為的な演繹化な

どと、とらえることも可能でしょう。これらの考え方は、それぞれの状況にマッチすれば、理論形成の妥当な在り方、方法として受け入れられることになると思います。しかしながら、社会科学のなかでも個別経済という特殊なコンセプトをもつ会計においては、これ以外のものも要請されます。それが、この本の主な内容になるわけです。(336.9-N54)



競馬社会をみると日本経済がみえてくる —国際化と馬産地の課題—

岩崎徹著 (源章社 2002.6)

大袈裟なタイトル! ちょっと気恥ずかしいのですが、実は、これは出版社がつけたものです。私は、いままでに学術書以外の本を出した経験はなく、はじめて、一般読者や競馬関係者、生産者、マスコミ等を意識

して書きました。そのためタイトルだけでなく、文章の書き方・表現、注のつけ方等々いろいろと勉強になったというのが実感です。本書は、競馬の華やかな世界だけでなく、それを支える軽種馬生産や生産を支える人たちにも目を向けてほしいという思いで書きました。今まで、競馬社会の全体像を明らかにした類書はなく、その意味では歴史的な本だと自負しています。(645.2-196)